

まって、大規模な場合との結びつき、定量的な考察に進みたいと思う。

終りに有益なご教示を受けた中田新瀨地方気象台長、坂田同予報課長ならびに気象研究所渡辺和夫室長に深く感謝する。

参考文献

- 1) 福岡管区，長崎海洋気象台，第7管区海上保安本部，1958：東支那海および九州近海の突風について，気象庁彙報，40，Vol 2.
- 2) 例えば香原信義，1960：九州およびその近海に

おける寒冷前線前面の不安定線について，気象研究ノート，11，149～195.

- 3) 今井一郎，1960：中・小気象現象とその解析，気象研究ノート，11，99～121.
- 4) 宮沢清治，1959：新潟における冬の最大風速の予報，研究時報，11，674～680.
- 5) 東京管区気象台，1960：北陸地方における局地不連続線に関する総合報告，地域気象調査資料，6，p.7 参照.
- 6) 杉山一之，1944，冬季新潟地方沿岸に発生する不連続線の蛇行と間歇的降雨雪の一原因，研究時報，1，96～100.

災 害 愚 考

白岡久雄

近年気象災害が相次いで起り，又本邦では暖冬其他の気象異常が引続いている。これ等のことも文明社会の進展とジャーナリズムの機能の増進が事柄を大きい評価にしているとも云えるだろう。

本年初頭『人民日報』の報ずる“旱害と水害の周期性”の論文によれば新中国成立の12年間に広い範囲に亘る災害は5回あったが，1959～1960の2年連続の旱害は激しく，或る地方では1年も日照りが続き，一般にしても水を必要とする季節をはきんで，6，7ヶ月も続いた。その被害面積は1959年は全国で6億ムー（1ムーは6，7畝）1960年は9億ムーに亘ったと云う。この災害は歴史的に見ても16世紀以来で1640年（明崇禎13年），1877年（清光緒3年）と1960年との3回しかない程の大きい災害であった。この論文の詳報を記載することがこの小文の目的でないのだが，其の他の災害でも中国では25万平方キロ（福建省に相当）に亘っての旱水害は，20世紀の60年間毎年平均4回あった計算となっている。

中国では黄河を治める者は国を支配すると云う程に，政治の要諦は治水であったのである。尚この論文中，中国の災害は他国の被害に比し，その持続時間でも，面積においても大きいと述べている。

本邦も歴史的に見て災害国である。これは，日本国の立地条件に大体はよるものと云ってよいのだが，又日本国の今日に至る政治の貧困が，防止に対する施策を遅らせ，災害の規模をいやが上に大きくしていることもまた万人衆知のところである。

英人アーノルド・トインビーの日本の近代に対する論評の中に，日本は諸種の災害が非常に多いことを指摘，当面の政治課題であるとし，また日本国の災害の規模は世界各地に見られる災害に比し，小さいことを述べ，従って政治上の課題としては比較上容易でなければならぬとしている。無論英人の口を借りる迄もないところである。

述べた様に中国と日本との災害の規模には大きな相違があるのは当然だが，単位面積あたりの規模は調査の要がある。然し英人トインビーの指摘の意味では一義的に大小は明らかなるところである。

話は違ふのだが，アメリカの少々昔の西部には，所謂ゴースト・タウンと云うのがある。云うまでもなくフロンティア達のひたむきな前進に取り残され，或いは，ゴールド・ラッシュを夢見た町が廃坑を背後にもつ等の廢市のことで，人間と文化の抜け殻である。一方大廈高樓が聳比し，スクエアとアヴェニューとの格子縞を持つニューヨークは現代文化の大きな所産ではあるが，これまたゴースト・タウン同様人間の不在を証明することが出来るかも知れない。近代の国家が将来，日本国を含めて，治山治水，護岸堤防を全うし，災害を大きく軽減することが可能かも知れない。然しそれはまた別の意味で今日の文明のもつ傾向を助長し，これまた一つの大きな廢墟となるかも知れない。人間社会はやはり大自然との全き調和の中こそ真の安住を得るものなのではあるまいか。